

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝、朝礼の時に、法人の理念とグループホームの理念の唱和を行い、日々の業務に活かしている。	事業所独自の理念が作られており、その理念を管理者も職員と共に唱和している。また、会議においても業務を振り返り理念が反映されているかどうか話し合っている。職員は理念を理解し、日々、入居者や家族そして地域と関わりを持ちながら実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	季節の行事を通して、保育園児、小、中学校と交流。喫茶、ボランティア交流を行っている。	ヨサコイ節を習ったと小学生が踊りを披露しに訪問し、発表の場が出来たと毎月コカリナ演奏に来ている方がいる。散歩中に畑から「持って行くかい？」と声を掛けられて野菜を頂いたり、かつての入居者家族が垣根や庭の手入れにも訪れている。また、併設施設との交流の機会もあり、多種多様なボランティアや地域の幅広い年齢層の人々と交流している。楽しませてもらうだけではホームの行事に招待したり、入居者手縫いの雑巾を関わりをいただいている人たちにプレゼントしたりといろんな形で感謝を伝えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	法人の活動として、地域住民に、家族介護者教室、いきいきリハビリ等、取り組みを行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回開催時、グループホームの雰囲気や、利用者の雰囲気等を見た上で意見頂き、サービスの向上に繋げる努力をしている。	会議は入居者、家族、地域住民代表、第三者委員、市職員らを委員に定期的に開催している。今年度第一回目の会議では22年度事業報告が詳細に報告された。第二回目は委員からの要望を受けてホーム内視察が行われ、入居者の生活も見ていただいた。その結果、ホームの様子も分かり有意義な話し合いへと繋げることができた。議事録を家族に配布しており「こういうこともしているんですね」と関心を持ち、喜ばれている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地区代表者、市の高齢者福祉課担当者が運営推進のメンバーに含まれており、連携を行っている。	介護保険や介護報酬等に関することで困ることがあれば気軽に窓口に出向いたり電話で相談している。市の担当者にはいつも親身になって教えていただいております。代行で更新申請に担当窓口に出かけたり、認定調査時には本人の状態を担当者に伝えている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止委員会を設置している。やすらぎ全体で「拘束しない」と言う共通認識をもち、グループホームの中でも起こりえるリスクを防止するよう、ケアに努めており、身体拘束は行っていません。身体拘束委員会は月に1度行っている。	全職員が身体的拘束その他入居者の行動を制限する行為や拘束による心身の弊害を理解している。法人全体で「身体拘束をしないケア」に取り組んでおりホームもそれを実践している。外出傾向など職員から見ての問題行動が生じた時には全職員で原因を探り対応策を検討後、本人が自由に行動できるようなケアに努めている。夜間に蛍光灯のスイッチを付けて散歩に同行したこともある。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	スピーチブロックを含む虐待についての理解を深め人権尊重を大切にするよう努めている。声掛けの仕方については、細心の注意を払っている。		

高齢者総合福祉施設須坂やすらぎの園グループホームホットファミリーやすらぎ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、対象となる利用者がいないため行っていないが、必要に応じ、各関係者と連携が取れるように体制は整えてある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所申込時にグループホームの説明を行い、入居時に利用約款、重要事項説明書を基に説明をし、理解、納得を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見、要望ポストの設置。第三者委員のメンバーが運営推進委員である。家族が、気軽に意見を言いやすいような関係作りを心掛けている。家族からの要望や、意見については、ミーティングで話し合い、運営に反映させている。	意見や要望を聞く機会として面会時や運営推進会議、家族が集まる8月と12月の行事など多くの場が設けられている。家族からは「気軽にいつでも訪問できる」との声もある。頂いた貴重な意見、要望は検討を加え運営に反映させている。入居者とはお茶を飲みながら直接要望等を聞く機会を設けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ミーティング時、意見、提案について、話し合いを行い、よりよいグループホーム作りを目指している。また、連絡ノートを活用し、意見、提案を書いてもらうようにしている。	毎日ミーティングを行い、職員の意見を聞いたり、企画・提案などについて話し合っている。管理者もフロアに出ており、業務の合間に職員から直接意見を聞くこともある。人事考課制度が導入されており、職員は個々に目標を掲げ、やりがいと向上心を持って業務に励んでいる。年2回上司との面接も行われている。複合施設全体の施設長も毎朝入居者と一緒に体操をしており、折にふれ入居者と関わっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度設置。個々の職員が、やりがいと向上心を持って仕事に取り組めるよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各種研修会、資格取得の受講通知を伝達し、希望があれば受講できる機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	2ヶ月に1度、グループホームネットワークに参加し、情報交換、勉強会及び交流を行っている。また、近隣のグループホームの空き状況の情報交換を行い、待機利用者の状況把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	新規入居時、体験入居期間を設けている。本人、家族から、情報収集に努め、アセスメントを行い、ケアプランに反映させている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居決定後から、家族の不安に思っている事や、要望を聞きだし、ケアプランに反映させている。又、面会に来られた時に、近況報告を行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所申込の際、話を伺いニーズに対して、必要なサービスの情報を伝える等、対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	活動や会話を通して、教えたり、教わったりしながら暮らしを共有している。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人との関わりがうすれないよう、外出、外泊、面会はいつでもできる事を説明している。誕生日や季節の行事には家族を招き、一緒に過ごせるよう工夫をしたり、盆、正月はご家族と過ごす事が出来るように働きが		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外出や面会等、制限することなく、友人、知人等、馴染みの人や場所が途切れないように必要に応じて家族にも協力頂くなど努めている。又、宿泊して一緒に過ごす事ができる。	行きつけの美容院で慣れ親しんでいる髪型にでもらっている入居者がいる。また、馴染みの洋品店へ出かけた時には「暫く来なかったがどうしたのか」と心配されたこともある。やはり顔なじみのお店におやきを買いに行くととても懐かしがられ、後日、その店の方がおやきを持って訪ねて来てくれたという。毎年遠方に在住の子供が宿泊したり、また、友人や家族との電話や手紙のやりとりをする方もあり、職員は可能な限り馴染みの関係が継続できるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずにご利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員間で利用者同士の関係を理解し、良好な関係が築けるようさりげなくフォローできるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後、経過状況を確認し、本人、ご家族が安心、安定するまではフォローを行っている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の意向に沿ったケアプランを作成し職員間で情報を共有しケアに努めている。意向に対しモニタリングを行い、困難等あればカンファレンスをし、本人本位のケアに努めている。	普段の活動を通して本人がどうしたいのか入居者の目線で考えたり、散歩をしている時に「天気がいいね、何処かに行きたいね」と話を進めながら思いや意向の把握に努めている。職員はいつも入居者の言葉に関心を持ち、話したことを記録に残し共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に本人と家族、及び担当ケアマネジャーと面談を行い、可能な限り情報収集に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	朝のミーティング、ケース記録、活動内容の記録、1W/1回血圧、検温測定。職員連絡ノート等にて情報の共有化を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族から意向を伺っている。センター方式シートのような様々なアセスメントシートを使用し介護計画に反映している。また、ケアプラン会議と題して、ケアマネジャー、看護師、担当職員等、多職種でカンファレンスを行っている。	入居者や家族の意向を基に職員等からの気づきや提案を収集し、入居者が安心し、生き生きと本人らしく暮せるように一人ひとりの介護計画が作成されている。毎月関係者が集ってケアプラン会議が開かれており、評価や見直しを行っている。計画通りに進んでいなかったり、現状に合わない場合には新たなものに作り変えている。職員が1~2人の入居者を受け持ちプランの原案作成もを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録、活動内容の記録、職員連絡ノート等にて情報の共有化を行い、必要に応じてミーティング時、話し合い、ケアプランに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	併設型の利点を活かし、利用者の状況に応じて、柔軟な対応を行っている。		

高齢者総合福祉施設須坂やすらぎの園グループホームホットファミリーやすらぎ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	買い物、馴染みの美容室、馴染みのお店、地域交流等、安全面に配慮しながら、一人一人の意向に沿った支援を行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診は家族対応して頂くのが基本だが、緊急時やむを得ない場合は職員が対応している。受診時、主治医に情報提供書を作成し渡しており、受診後、主治医から返書頂く等、医師と連携を図っている。	本人や家族の意向に沿ったかかりつけ医となっている。往診には3人の医師がみえている。約半数の入居者が通院している。看護師が配置されており、かかりつけ医や医療機関との連絡を密にとりながら一人ひとりの健康管理や状態変化に応じた支援を行っている。協力医療機関の間には入院や緊急時の受け入れなどの連携体制が整っている。また、協力歯科とは必要に応じての往診も可能な体制となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師を配置。利用者の健康状態の把握に努め、何かあれば即、対応できる体制である。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づ	協力医療機関があり、その病院の連携室担当者と情報の共有を図っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に、重度化した場合や、ターミナルケアについて併設事業所との連携と合わせ説明を行っている。	契約時に重度化した場合や終末期についての事業所の方針を本人及び家族等に説明している。実際の看取りのケースはないが、終末期を住み慣れたホームで過ごし、量の上でと望む家族の意向で自宅に戻り、最期を迎えたケースがある。看取りに関する指針があり、本人の状態を見たと改めて説明し同意書を交わしている。看取りに関しては状況に応じて家族と相談し対応している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時のマニュアルに沿って対応できるよう、職員間で確認をしている。応急処置の仕方について、法人全体で研修を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域住民、消防署の協力のもと、年1回大規模な防災訓練を実施。その他毎月1回、防災について危険個所の点検、非常口点検、通報訓練を行っている。火災発生時の役割分担の確認。夜勤者は勤務前、火災発生時の対応マニュアルを読む事を徹底している。	年一回複合施設全体で防災訓練を行っている。今年は10月末に消防署や消防団、地域住民などの協力を得ながら夜間想定で行う予定である。ホーム独自に毎月防災に関する訓練を繰り返し行い、職員各自が実際の場面で実践できるように取り組んでいる。防災設備としてスプリンクラー、火災報知機、通報装置、消火散水栓、煙感知器、熱感知器などを整え、入居者への万全の対策を講じている。夜間の避難路の両側には1m間隔でソーラーライトがあり足元も明るく道しるべとなっている。	

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人権尊重を念頭に、個々のプライバシーに配慮したケアを行っている。入浴時、排泄時は特に、本人の気持ちを大切にしているため、状況に応じて、同性介護等、柔軟に対応している。入室する時は、本人の許可を得て、入室するように心掛けている。	理念の一つに掲げており、職員は人格を尊重しプライドやプライバシーを損ねない支援に徹している。一人ひとりが持つ価値観や歩んできた人生、馴染みの生活スタイルなどを尊重し、更に希望や願いを聴き入れ、その人らしさを生かすことに心がけている。研修生や実習生には始めから職員と同じような声かけや話し方をしないようにとその主旨を説明し指導している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	何が食べたいか、何所へ行きたいか等、状況に応じて個々の希望や、思いなど伺っている。食事時、おやつ時、散歩時等の機会を捉えて気軽に希望を表し、自己決定ができるよう反応を観察しながら行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個々の希望に応じて施行している。本人の行きたい時に、仏壇へお参りに行ったり、利用者同士で、喫茶に出掛けたり、個々のペースに合わせて、ゆとりを持って対応出来るように努力している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個々の好みに応じて、本人に選んで頂いている。洋服、髪型、化粧、アクセサリー等、その人らしさを大切にしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	メニューは併設施設の栄養士が作成した献立を基にグループホーム独自にアレンジしている。利用者の状態に合わせて職員と共に食事作りやおやつ作りを行っている。又、食器の一部は自分の使い慣れた物を使用している。職員の食事は検食者以外は自分で持参した食事を食べる事になっているが、月1～2回、お好み昼食や出前デー等の機会を設け検食者以外の職員も一緒に食事を摂っている。	食材は入居者と一緒に買い物に行っている。朝食と昼食、おやつは入居者と一緒に準備しているが夕食に関しては併設施設の調理室から届くので盛付けを一緒に行っている。旬の食材を使い、彩を工夫した料理が小鉢に盛付けられ、職員や入居者とおしゃべりの中で入居者のペースで食事が進んでいる。入居者の嚥下状態等に応じた食形態で調理もしている。	検食者の職員一人が入居者と一緒に食事をしているが、会話がはずみ更に食事を楽しむことが出来るようにお弁当持参の職員も同じテーブルに着き食事をすることを期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分、食事量のチェックを行い、摂取状況の把握に努めている。食事量が少ない利用者には、好みの嗜好品等を食べて頂くように工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、歯磨きをするように声掛けと、個々の力に応じた口腔ケアの援助をして、習慣づけを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し、個々の排泄パターンを把握し、すべて個別対応を行い、失禁を最小限に抑える努力をしている。リハビリパンツ等は、個々の状態や、昼、夜等の時間に応じた物を使用し、自立支援に力を入れている。	一人ひとりの排泄リズムを基にトイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援が行われている。入居者のプライドに配慮しながらさり気なく対応している。尿意のない入居者については皆で検討し、時間対応でトイレでの排泄を試みている。失敗があった場合には「お部屋までお願いします」などと声をかけている。また、誘導時間も随時検討しなおしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	極力、薬に頼らず食物繊維を取り入れた食事を心掛けている。また、毎日便秘体操、腹部マッサージ等を行い、排便に繋がるよう取り組んでいる。改善されない場合は、主治医、家族と相談の上、薬等を処方して頂く。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週6日入浴日を設け、殆どの利用者が毎日入浴している。体調不良等で、入浴できない時は、温かいタオルで体を拭いている。入浴時間は午後～夕食前まで利用者は、その時間内で入りたい時間を選んで頂いている。季節に応じて、楽しめるよう行事湯を行う等、工夫している。	週6日入浴できるので多くの入居者が毎日のように入浴している。菖蒲湯、柚子湯、りんご湯など季節に応じたお風呂もあり入居者の楽しみの一つとなっている。入浴を嫌がる入居者はいないが体調不良で入浴できない場合は清拭や更衣も行う気持ちよく休めるよう配慮している。週1日入浴日をつくり外出の機会にしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	身体状況や、生活習慣に合わせ、適宜、休息できるように支援している。日中の活動の中に散歩等、織り交ぜながら、夜間の安眠に繋がるように努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	誰が何の薬を内服しているのか、職員が解るように薬の内容をケース台帳で確認できるようにしている。内服状況と現在の症状に変化がないか、常に職員間で観察を行い、変化時は看護師に報告。主治医と相談し連携を図っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	予め、本人の楽しみや、趣味、生きがいについて、本人や家族からリサーチし、日々の暮らしの中に取り入れ、力の発揮や、楽しみに繋げている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	行事として遠出をすることもありますが、日常的に地域の保育園や中学校の音楽会・運動会等にも出掛け、近隣の方の声掛けで自宅の藤を観に出掛けることもある。また、職員では対応しきれない場合は、家族に協力を求める事もある。	四季折々、近くの博物館や公園、お花見などにドライブがてら出かけている。日常的には法人施設を取り囲むようにある果樹園のリンゴやブドウ、サクラボの花を眺めながら、また、秋にはたわわに実る果物を見ながら散策している。天気の良い日には併設の特養や老健施設めぐりを楽しんでいる。	

高齢者総合福祉施設須坂やすらぎの園グループホームホットファミリーやすらぎ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自己管理ができる利用者は、買い物、喫茶、お賽銭等、個々の希望に応じた使い方をしている。自己管理不十分な利用者に対しては、買い物時に一緒に付き添いをする時、お財布を渡し購入が済んだら、預かるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望時、その都度、いつでも電話の利用が出来る。字を書きたがらない利用者が大半だが手紙があると喜んで。年始の挨拶状は、どの利用者も出せるよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	日中、利用者の要望により、小まめに電気を消している。照明は、間接照明を使用。心地よく、落ち着ける場としている。壁飾りは、季節感を取り入れ、利用者と職員が共同で作品を作っている。トイレは薄暗く、電気を使わない利用者が居るため、足元センサーを使用している。	居間兼食堂の広いフロアにはドッシリとしたテーブルがあり入居者は日中の多くの時間をここで職員と一緒に過ごしている。外を望めるガラス戸の向うには洗濯物がなびき、畑や果樹園が広がっている。干し豆を選別する方、本の一節をノートに書き写す方、テレビを見る方等、各々の居場所で好きなことをしている。ゆっくりと時間が流れ、安心して過ごせる居心地の良い場所となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合う利用者同士が、気軽に会話ができるように、テーブル席の配置等、気配りをし自由に穏やかに過ごせるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者自身の家具や思い出の写真を持ち込んだり、ご家庭で使用していた馴染みのある物を持ち込んで頂いている。宿泊の際は本人の部屋で一緒に休んでいただいている。	自宅から寝具やベッド、家具、テレビや家族写真などが持ち込まれている。また、入居後に作った作品や習字、誕生カードなども飾られており本人が安心して気分良く暮せる居室となっている。自室に「どうぞどうぞ」と誘う方が毎日日記を書いていると言って引き出しから何冊もある大学ノートを取り出し見せてくれた。また、写真を指差し「この人が私の娘」との説明もいただいた。自分の居室をととても気に入っている様子が垣間見られた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	「出来ること」「出来ること」をアセスメントし、持てる力を最大限に発揮し、出来る限り自立した生活を過ごせるように支援している。		